小学校三年の部　第二席　――――――　対象作品／フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク著『わたしの足は車いす』あかね書房

「がんばらなくてもいいんだよ。」

弘前大学教育学部附属小学校　泉　愛菜

「がんばってね。一生けん命がんばって。」

もし、わたしのクラスにアンナのような友だちがいたら、きっとわたしは、こんなふうに声をかけてはげましていたと思います。

でも、それはアンナにとって、本当にうれしい言葉なのかな。わたしは、本を読んでいるうちにそう思い始めました。

アンナは、生まれつき足がマヒしていて、両足とも動きません。

わたしは、両足でスキップをしてみました。足が自由に動いて、ちゃんとできます。もし足が動かなければ、歩くことも泳ぐこともできないと思うと、とてもこわくなりました。一人では何もがんばれないかもしれません。

でも、アンナは「みんなから、何もできない子だと思われたくない。」という気もちで、いつもがんばっています。一人で着がえもできるし、お母さんのおつかいで買い物だってできます。自分の気もちをだれにも分かってもらえなくて悲しかった時も、がんばって、こっそりなみだをこらえました。

わたしはこの時、はっと気がつきました。アンナは友だちに「がんばってね。」なんて言われなくても、もう一人でじゅうぶん一生けん命がんばっているということに。そして、時々がんばりすぎてしまっているということに。

アンナは、本当は何も病気のない子になりたくてたまらなかったし、くやしかった。そして、「かわいそうな子」「ふつうとちがう子」と思われるのが、とても悲しかったのだと分かりました。それなのにアンナは、

「生まれつきだからしょうがない。」

そう自分に言い聞かせて、がんばっていたんだと思います。でも、本当は心の中でずっと泣いているのです。だから、ジギーが太っていることをバカにされた時、「他の人とちがうからってバカにするのはよくないわ。」と、はらが立ったのです。アンナも人とちがうから、ジギーの気もちがよく分かるのです。

わたしは、アンナが友だちに「がんばってね。」と言われたら、「こんなにがんばっているのに、これ以上何をどうやってがんばればいいの。」と泣きたくなるような気がしました。

そして、アンナにどんな言葉を言ってあげるか、もう一度じっくり考えてみたら、新しい答えが出てきました。それは、

「もう、がんばりすぎなくてもいいんだよ。」

「泣きたい時には、がまんしないで泣いてもいいんだよ。」

この二つの言葉です。

そして、アンナががんばりすぎなくてもいいように、わたしができることをお手伝いしたいと思いました。クラスのみんながお手伝いをすれば、「一足す一が二」になるように「たくさんのお手伝い」になるし、アンナが泣いたら、みんなの手でだきしめてあげれば、泣き顔はきっとすぐに笑顔にかわるから。